

山梨県師範学校附属小学校編集の『小学文芸読本』の位置

—文芸的「国語副読本」の先駆的成果—

府川 源一郎

はじめに

井上敏夫は、大正期の国語教科書に触れた論述の中で、次のように述べている。^{〔1〕}

おそらく、この大正中期から昭和初年にかけてほど、副読本、文学読本の数多く発行された時期はないであろう。

また、滑川道夫も、「国語副読本」に関して、次のようにいう。^{〔2〕}

国定教科書尊信時代にあつて、教材範囲を拡充し、多様な教材化をもたらししたところに、副読本のもつ国語教育史的意義が見出されよう。当時の「正教科書付き主義」（昭3）批判を現代の情況に照応させて、さらに掘り下げてみる必要がある。国語副読本は、国語科教育の外にはなく、内に在ったという事実を大事に

考えたい。（傍線稿者）

井上や滑川が述べているように、大正期から昭和初期にかけて、正式な国定教科書とは別に、数多くの「国語副読本」が刊行され、それが実際に教室で使われていた。しかし、どのような「国語副読本」が刊行され、またそれがどのように使用されたのかに関して、十分な研究が進んでいないとはいえない。おそらく「国語副読本」は、教科書研究（教育史研究）と子ども読み物研究（児童文学研究）との境界領域にあるため、どちらからも積極的なアプローチがなされてこなかったからであろう。しかし、当時の多くの子どもたちは、国定読本に載せられた教材だけではなく、民間から発行された各種の「副読本」にも触れていたのだ

った。

それらのうち、本稿で取り上げる、山梨県師範学校附属小学校編集の『小学文芸読本』は、当時の著名な日本作家のアンソロジーであり、当代名作子ども読み物集と言つていいようなラインナップになっている。この後、商業出版社が同様の叢書を、大がかりな規模で出版することになるのだが、この本はその先鞭を付けた仕事だと評価することができる。また、自由主義教育の盛行に棹さして刊行された地域の師範学校附属小学校が編集した副読本のトップバッターとしても位置づけられる。本稿では、この『小学文芸読本』を取り上げて、その意義について総合的に考えてみたい。

シリーズの概要

このシリーズの全体構成と内容は、確認できる限りでは、以下のようである。このうち、「初級」に関しては現物が確認できず、その内容は、「上級二」の巻末に付された広告の「既刊内容」によつた。^{〔3〕}

初級一 根岸嘉明編？ 収録作品「トケイノハリ 北原白秋」「アカイトリコトリ 北原白秋」「ブランコ 北原白秋」「モリノナカ 野口雨情」「うさぎのどんぼう 北原白秋」「お山のたいしやう 西條八十」「きのぼりたゑもん

西條八十」「やねの石とすいしや 島崎藤村」外数十編
(刊行年月日不明) 定価五〇銭 邦光堂

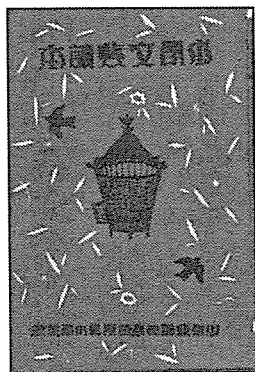
中級一 山梨県師範学校附属小学校編 収録作品「ひかりの星 浜田広介」「碁石を呑んだ八ちゃん 有島武郎」「納豆合戦 菊池寛」「お話し二つ 島崎藤村」「時計のない村 小川未明」「三人の百姓 秋田雨雀」「清兵衛と瓢箪 志賀直哉」「蜘蛛の糸 芥川龍之介」「お釈迦様の燈火 島崎藤村」「童謡三編 北原白秋」一九二二(大正一一)年二月一八日刊 定価五〇銭 邦光堂

上級一 根岸嘉明編 収録作品「最初の時計 鈴木善太郎」「争鬭 秋田雨雀」「万年筆 加藤武雄」「小品三つ 武者小路実篤」「或る少年の死 吉田弦二郎」「春 藤森成吉」「父帰る 菊池寛」「童謡と民謡・五編 北原白秋」一九二四(大正一三)年七月一七日 定価六〇銭 邦光堂

上級二 根岸嘉明編 収録作品「太陽と蛙 小川未明」「泣く児 鈴木重信」「仏陀と戦争 秋田雨雀」「兄弟 山本有三」「未知の世界 加藤武雄」「土蔵 須藤鐘二」「名君 菊池寛」「小僧の神様 志賀直哉」一九二五(大正一四)年一〇月二七日 定価五〇銭 邦光堂

これら四冊のシリーズのうち、一番最初に刊行されたの

が、『小学文芸読本 中級』である。そのことは、『小学文



『小学文芸読本 中級』表紙

芸読本 中級』の冒

頭部の「この読本の

編纂に就いて」に、

「…逐次刊行される
中学年用第二冊以
下及び童謡と幼年詩
とを主なる内容とす

る初学年用には、つとめて之（挿絵のこと・府川注）を挿入するつもりであります。尚、高学年用は主として現代作家の創作をもつて之を編むと考えています。」とあることから判断できる。つまり、このシリーズは、『小学文芸読本 中級』が刊行された後、中学年用の二と初学年用、さらには高学年用の刊行が意図されていたのである。

しかし実際には、『小学文芸読本 中級』の「二」は、刊行されなかったと思われる。『小学文芸読本 中級』が出版された後、「初級一」か「上級一」のどちらかが刊行され、「初級」「中級」「上級」のそれぞれ「一」が出そろったところで、「上級」の「二」がそれに加わったのである。『小学文芸読本』のシリーズは、おそらくこの四冊のみで終結しており、「上級二」が、最後の刊行物だったと判断される。また、それらは一氣に刊行されたのではなく、一年に一冊くらいの比較的ゆっくりとしたペースで公刊さ

れた。

『小学文芸読本 中級』の「序」

四冊の中で、最初に出された、『小学文芸読本 中級』の内容から見ていく。この本は、山梨県師範学校附属小学校の編集で、一九二二（大正一一）年一月一八日、東京の邦光堂から刊行されていた。四六判、一八八頁 定価五〇銭。図版の家蔵本は、その翌年二月に発行された再版本である。ここから、この本が増刷になったことも確認できる。まず、この読本の特徴として、「序」が三編も付けられていることをあげることができるだろう。

第一の「序」は、澤柳政太郎によるもので、「大正十一年一〇月」の年月表示がある。澤柳の「序」は、「定められた教科書の外に読み本の必要なことは私共が五六年前に成城小学校を始めた以来痛切に感じている所で、世間にも同様の考えのある人は少なくなくあらうと思はれる。」と書き出されており、この本の刊行が、成城小学校の教育実践などと同一路線にあることを推測させる。また、「根岸君達の今度新にもせられた『小学文芸読本』は、未だ十分之を読んでも見ないけれども、同君等の教育に対する平素の研究や態度から推して、適当のものであらうと考へる」と澤柳が記述していることから、「序」を書いた澤柳と、この本の編集者である根岸嘉明とが、何らかの交流を持って

いたことも推察できる。

第二の「序」は、菊池寛によるものである。やはり「大正十一年一〇月」の表記がある。菊池の「序」は、レトリカルで格調の高い文章である。

人生の真実を語り、生活の実相を示し、人心の秘奥を描くもの、文学を描いて外にない。文学は人生の鏡であり、人生の旅行記である。昔は、大学を以て、徳に入るの門だと云った。現在に於て文学は正に人生に入るの門である。文学に抛りて、人生の予備知識を得、而して実人生に旅立つならば、恐らくは処世道に於て、踏み誤ること少ないであらう。文学はこの意味に於て人生学であり人間学である。(下略)

菊池寛はこのように述べ、「今偶々『小学文芸読本』発行の企があるのを知つて、現代教育の欠陥を補ふに、これほど適切な、これほど時宜的な企はないと思つた。私は乞はれるまゝに、僭越を顧みずに序をかけた。」と、結んでいる。菊池は、地方の小学校教師の依頼に応えて、こうした推薦の文章を書き、出版に花を添えたのである。菊池の側にも、子どものための文学読本の必要性への十分な認識があつたからこそ、こうした企画に協力したのであらう。そうした菊池寛の姿勢は、やがて、一九二五(大正一四)年に、自身が編集した『小学童話読本』(興文社)の仕事へとつ

ながつていくことになる。

第三の「序」は、山梨県師範学校附属小学校主事だった荻野素助によるものである。

荻野は、「すべての人に恵まれた芸術の芽ををしげもなくふみにじられた子供が、どうして、温き心の持主となり、博大な愛に生きる人となり得ませう。」と述べ、そうした「重圧にたへかねてゐる可憐の子供たちを救うために、この書を編纂したと記している。さらに、「この書に収めたもの―真剣に人生に就いて考へてゐる芸術家の手になつた創作こそ、子供等にとつて真の読みものであることは、もはや誰しもが否むことの出来ない事実であると思ひます」と断言する。「芸術教育」こそが、子どもたちの成長に役に立つという言明である。これにも、「大正十一年一〇月」の表示がある。

以上が、三つの「序」の概要である。どの「序」も、子どもたちに文芸作品を読ませることが広義の教育的な意味を持つことを高々とうたっている。だが、もし地域の附属小学校が主体となつて副読本を刊行するのなら、荻野主事による「序」だけでも十分であらう。それにもかかわらず、この刊行物には、もと文部次官であり、東北帝国大学、京都帝国大学の総長を歴任し、当時は新教育の牙城成城小学校を率いていた澤柳政太郎と、文壇のドンであつた菊池寛による序文が付されていた。地方の附属小学校が編修した

小冊子の序文としては、いささか過ぎた感じがしないわけではない。

なぜそうした権威付けが必要だったのかは、不明だが、もしかすると、この本の刊行元が東京の邦光堂という民間出版社だったことと関係があるかもしれない。邦光堂は、この時まで少年向けの啓蒙的読物などを出版していた小出版社である。昭和期に入ってから、社会科学に関する刊行物に手を広げ、尾佐竹猛の著者なども刊行することになる。つまり、この本は、民間の商業出版社が作製販売した「商品」でもあったのである。附属小学校と出版元とが、どのような出版契約を結び、この本をどのように普及させようとしていたのかなどの詳細は分からない。だが、『小文学芸読本』が、山梨県の小学校の子どもたちへの地域的な頒布だけを意図しただけではなく、最初から全国的な商圏を視野に入れていたとするなら、澤柳や菊池の「序」は、その戦略のための大きな付加価値だったと考えられる。

このように、「副読本」というメディアを検討するにあたっては、その書物の内容だけではなく、それがどのような出版社からどのような意図で刊行されたか、あるいは、それがどのように流通したのかなどを、できる限り視野に置く必要がある。

編集の意図

さらに、三つの序文の後には、「この読本の編纂に就いて」という文章が付けられ、次のように冒頭部が書き起されてた。筆者は、根岸嘉明と矢崎静の連名である。

小文学芸読本は、まことの教育を建設することに努力し、ある本学の研究学級で、読本としてこども等に試みたもの及びこの後試みやうとするものゝうちから編輯いたします。

此の本に収めた十編の創作と三編の童謡とが物語つておりますやうに、この読本の文章は澁刺たる人間味に富み、従つてこどもの生活に即しておることを主要な条件として選択いたします。故に、こども等にとつてはよき心の糧としての読みものであると同時に、国定読本によつては、満たし得ざるものを補つて余りあると信じます。(中略)

ここには、附属小学校の「研究学級」で、取り上げた作品を集めたことが記されていると同時に、国定読本一辺倒の国語学習の現状に対しての批判めいた文言もある。

また、少し後には、「言ふまでもなく「読む」ことは、各自の創作であります。そこには、自由と創造の天地がなければなりません。」という、読み方学習に対する主張も打ち出されている。「読む」という行為が「各自の創作」だ、という主張は、当時の読み方教育において必ずしも大勢の認める考え方であつたわけではない。類似の宣言であ

る芦田恵之助の有名な「自己を読む」という考え方を持ち出すまでもなく、これは、旧来の読み方指導に対する問題提起であり、それはほかならぬこの時点における山梨県師範学校附属小学校の自由主義的読み方教育の主張だと考えることができる。そうした、読み方教育を伸展させるためには、国定読本だけではなく「文芸的」な副読本が必要だと述べているのである。

つまり、根岸たちは、学習者たちが「各自の創作」としての（読み）を展開するには、国定読本に掲載された実科的で狭小な題材を取り扱った教材だけでは不十分であり、次々と新しく創作され、また教科書以外の媒体で多くの子どもたちが読んでいるような、現代作家の童話や童謡に触れさせなければならぬと考えていたのである。木村勇人は、こうした点に、この読本の「文学教育の目的が端的に表れている」と評している。

また編集に当たって、尋常三年程度で習得されていると考えられる漢字以外には振り仮名を振ったことや、同一の文字が数回同一の文章に繰り返されるときは、読者がそれに慣れただろうからルビを除いてあることなども、記されている。こうした教育的配慮は、現実に小学校で子どもたちを相手にしている教員であれば、当然の配慮であろう。

さらに、「難解のおそれある語句や、広きに通じない方言は、改竄の冒険を敢へていたしました」と、断り書きが

してあり、志賀直哉の「清兵衛と瓢箪」に、最もその箇所が多かったことも書き添えられている。この短編の出典は、一九二二（大正一一）年に改造社から刊行された『薔々―創作十三篇』であったと考えられる。当然のことながら、既成文壇作家の作品を転載するわけだから、それぞれの作家に対してこの読本へ収録する許諾を得ていたであろう。とするなら、作家の側も、こうした企画に賛同していたことと、その場合、自分の文章に手入れられることになることをある程度は認していたことになる。

荻野素助と根岸嘉明

この読本の編集に関わって、編集人として名前を出している教員たちは、どのような人物だったのだろうか。『創立六十周年記念誌・山梨県師範学校』の「創立以来ノ旧職員」の項から、この読本の「序」を書いた荻野と、編集に携わった根岸、矢崎の「就職年月」と「転免年月」とを抜き出し、それぞれの在任期間を算出すると次のようになる。

〔4〕

荻野素助	一九一一（明治四四）年三月	一九二三（大正一二）年一月	一一年九ヶ月
根岸嘉明	一九一八（大正七）年二月	一九二四（大正一三）年五月	五年六ヶ月
矢崎静	一九一九（大正八）年三月	一九二三（大正一二）年三月	一一年九ヶ月

一二二年二月

四年〇ヶ月

荻野は、山梨県師範学校附属小学校に、「教諭」の職位で赴任してきた。出身地は、神奈川県である。一九一七（大正六）年には、十一級俸が下賜され、「師範学校教諭兼師範学校舎監」となった。また、前述したように、『小学文芸読本 中級』の「序」の肩書きは、「山梨県師範学校附属小学校主事」となっている。おそらく、附属小学校の在任期間も長く、そこで要職を勤めてきたベテランの荻野が、附属小学校を代表して「序」を書き、また出版刊行に関わる様々なバックアップをしたのであろう。〔5〕

一方、根岸・矢崎の両名は、荻野の着任から六年ほど後、相前後して附属小学校に「訓導」の職位で着任している。根岸・矢崎の出身地は、ともに山梨だった。もしかすると、両名の赴任に際しては、荻野の意向が働いていたかもしれない。というのも、



『山梨教育』大正14年5月号

荻野素助が赴任し、矢崎静、根岸嘉明が退任するまでの間の、山梨県教育事情はおおよそ次のようであったからだ。〔6〕

『山梨県教育百年史』は、大正五年の地元の教育誌「山

梨教育」を検討した上で、「このころ既に、山梨県では、大正中期における新教育実践への素地はかなりのまで形成されていたのではないか」と述べている。また、大正一〇年一二月の「山梨教育・三〇〇号」では、東京高師の樋口長市が「欧米の民主的教育」を紹介している。さらに、大正一四年五月の「山梨教育・三二七号」には島崎藤村・北原白秋が、大正一五年一月の「山梨教育・三三五号」には芥川龍之介が寄稿している。こうしたことから、山梨県においては、大正期に入ってから「新教育」や文学に関する一般教員たちの関心が高まりつつあったことが窺える。その「山梨教育・二八一号」（大正七年九月）には、当時鰻沢小学校訓導だった根岸嘉明の「動的教育と私」という論考が載せられていた。〔7〕

根岸が関心を持った「動的教育」とは、言うまでもなく兵庫県明石女子師範学校附属小学校主事であった及川平治が提唱した「分団式動的教育説」のことである。及川は、一九〇七（大正一〇）年に開催された「八代教育思潮公開講演会」では、トップバッターを引き受けた。集会には、全国から四〇〇〇名の小学校教師が集まったと言われているが、この時に「新教育」が、全国の教員たちから注目を浴びていたのが推察できる。もちろん根岸嘉明もそこに集まった熱心な若き教師たちと共通の気脈を持った一人であっただろう。〔8〕

根岸は、「山梨教育」に掲載した「動的教育と私」の中で、「動的教育」に心を惹かれたのは、「在来の教師に不安と不満を感じ、何うかして力強い根拠と信頼するに足るべき方法とを得たいと探索した結果落ちついたのがこの畑でした」と、当時の教育の現状に対する問題意識からだったことを記している。根岸は、及川の「動的教育」をそのまま実践しようとしたのではなく、それを当時の教育の状況を切り開くきっかけの一つとして受け止めたのである。

そうした根岸の教育実践が注目されたのか、彼は山梨県師範学校附属小学校に迎えられ、大正一〇年三月から大正一三年頃まで設けられた自由学級（研究学級）の担当として、新しい試みに専心することになった。『創立六十周年記念誌・山梨県師範学校』には、附属小学校における根岸の試みのおおよそが記されている。^{〔9〕}

吾が校で採つたものは自由教育芸術教育の二であつた。自由教育はモンテッソーリ女史の主張に依るところ多く即ち児童を独立の人とする間に彼等に自由を許しその自発的活動に俟たねばならぬ、故に干渉することは相当に禁ぜねばならぬとした。又此の思想に生物学的立場から理論づけて学習作業にも極めて自由な方針をとつた。併して大正十年三月から自由学級一学級を設け児童十数名を收容した。此の学級は全く練習生を配属せしめず又参観を禁じた。時間割を用ひず、国定教科書は年次に関係せず、又読み

物を多くし作業を重んじ教材も亦教師の総意による物を以てした。此の学級は大正十三年頃まで試みに置かれたものであつたので其の結果については明確に帰着点を見出さずして止んでしまつた。

おそらくこの「読み物を多くし」あるいは「教材も亦教師の総意による」という記述が、『小学文芸読本 中級』の刊行と深く関係していると考えられる。

また、附属小学校における根岸の実践に関しては、小原國芳が、後年になってから、次のように回想している。

〔10〕

附属小学校における自由学級を見せてもらいました。大正十年三月から十三年まで続けられました。当時、方々の附小で、長野や千葉、富山や鹿児島女高師の如く、附小全体が実践されたのは例外として、自由学級で新教育の研究に手をつけられたものは山梨の根岸さんの教室も見せてもらいましたが、さすが秀才で熱心党の君。立派なものだと感心いたしました。

尾和瀬保太郎と矢崎静

さらに、この『小学文芸読本 中級』が作成された後になつて、山梨県師範学校附属小学校に訓導として着任した尾和瀬保太郎（在任期間・大正一二年九月―一三年一月）も、根岸嘉明とともに自由教育を展開した一人らしい。

中野八吾は、そのことを『都留市学校沿革誌五』の中で、尾和瀬の前任校だった東桂小学校における教育実践に触れながら、次のように書いている。〔1〕

（尾和瀬は・稿者注）丁度その頃発刊された「赤い鳥」を国語の授業に教科書代わりに使ったり、図画は自由画本位であり、綴方は自由先代、唱歌は童謡ばかりということで保守的な校長をはらはらさせた。彼は竹久夢二の画をすきだつた。（中略）尾和瀬は後山梨師範学校附属小学校の訓導となり根岸嘉明と共に自由教育を実施した。当時自由教育は全国的に進歩的な教育者の間に行われたものであるが、自由主義は放任主義に通ずる所が多く、まともでない気分本位になり易い所から気分教育であると評されるものもあつた。根岸等の試みも遺憾ながら其の部類に属するものとされた。

根岸にしても、尾和瀬にしても、前任の公立小学校で行っていた自由主義的な実践の経験をもとにして、附属小学校の自由学級の中で、それをさらに徹底させた授業を展開したことが想像される。とりわけ、「赤い鳥」を教科書代わりに使ったという尾和瀬の試行は、そこからアンソロジーのようなものを作成して一書にまとめようと考えれば、すぐそのまま山梨県師範学校附属小学校で作成した『小学文芸読本』として具体化するだろう。

さらにこの『小学文芸読本』のもう一人の編集人である矢崎静に關しては、『峡中文人録』に、次のような記載がみえる。『峡中文人録』は、一九二三（大正一二）年に刊行された山梨出身者の「文人名録」であるが、矢崎はそこに「文人」の一人として、登載されている。教員の仕事と併行して、文学的な活動も行っていたからだろう。〔12〕

変名星野草二を用ふ。明治二十八年十月十一日北巨摩郡に生まる。大正六年県立師範学校卒業後小学校教員となり、師範学校附属小学校訓導たりしが大正十二年二月東京京橋区鉄炮洲小学校に転ず。思想上の主義傾向に曰く「教育の上にては児童らしき児童、人間らしき人間として成長させたき意願より、芸術教育に力を注ぎ、文芸方面にては新理想主義」と。「新任教師」「あくがれ」「去り行くもの」「恩賜林記念日唱歌」等の作あり、赤土社同人。現住所東京市神田猿樂町二十一青雲閣。

この記載によれば、矢崎は、二〇代半ばで附属小学校に赴任し、三〇代に入ったところで、甲府を離れて上京している。矢崎は、文芸活動のみならず、芸術活動全般にも関心があったようで、『峡中文人録』には、「赤土社同人」だとの記載もある。知られているように「赤土社」は、楠部彌次、八木一艸らにより新しく結成された陶芸作家団体で、大正デモクラシーの氣運に乗って設立され、従来の

陶芸界に新風を吹き込んだ。赤土社の活動自体は長く続かなかったようだが、矢崎は、こうした新進の芸術運動に参加する志向性を持っていたのである。附属小学校で自由主義教育を推進しようとした情熱も、そうした活動と深く関係していたであろう。

このように、根岸嘉明、矢崎静、あるいは尾和瀬保太郎などの自由主義教育に関心を持ち、それを具体的に展開した若い教師たちと、荻野素助主事の尽力の下で、「自由学級」を支えるテキストとしての『小学文芸読本』が、山梨県師範学校附属小学校編集として作製されたのである。浜田広介、有島武郎、菊池寛、島崎藤村、小川未明、秋田雨雀、志賀直哉、芥川龍之介、さらには北原白秋の作品を収録するという編集方針は、当時考えられる最高の著者を揃えた子ども向け文学アンソロジーとして結実していた。こうした先進的な読本が地方の師範学校附属小学校によって刊行されたということ自体が、大正デモクラシーによる教育運動の一つの大きな成果だったと考えられる。

山梨県における児童文芸運動

また、この時期には、山梨県の児童作品が『赤い鳥』にかなり大量に投稿されていたという事実も、ここで指摘しておきたい。具体的にそれを見ると、大正九年から一二年にかけて、山梨県北巨摩郡鳳来小学校、同郡小淵沢小学校、

同郡篠丸小学校、同郡村山西小学校、同郡多麻小学校、同郡阿部小学校、同郡篠尾小学校、同郡葦崎小学校、同郡安都小学校、同郡泉小学校、南巨摩郡増穂小学校、同郡鵜沢小学校、北都留郡広里小学校、同郡広里東小学校、同郡鳥沢小学校、南都留郡西八代小学校、同郡一色小学校、同郡上九一色小学校、同郡大塚小学校、同郡尾懸小学校、同郡道志小学校、東山梨郡日下部小学校、甲府市六切小学校、などに所属していた児童の作品が、『赤い鳥』の「作文・綴方」「童謡」欄に、多数掲載されている。とりわけ鳳来小学校は学校をあげて『赤い鳥』への投稿活動に取り組んでおり、数編の児童の作品が、毎号必ずその誌面に掲載されている。いわば山梨県は、児童雑誌『赤い鳥』を底辺から支えていた地域の一つでもあったのだ。

一方、山梨県師範学校附属小学校の自由教育は、学校全体を挙げて実施されたものではなく、三年ほどの試行を経ただけで、終息してしまつたらしい。その期間内には、『小学文芸読本』の「初級」や「上級」を続けて刊行することも検討されたと思われるが、結局、山梨県師範学校附属小学校の名前で編集された副読本は、『小学文芸読本中級』だけで終わってしまった。もし山梨県師範学校附属小学校が、学校全体で積極的にこの仕事の継続を後押したならば、たとえ矢崎や根岸が退任した後でも、『小学文芸読本』の続刊である上級（あるいは初級）を刊行すること

は可能だっただろう。だが、実際には「自由学級」の廃止とともに、自由教育への反省と懷疑とが生まれ、そこで刊行された「副読本」を、続けて附属小学校が作製するという機運も潰えてしまったと思われる。『創立六十周年記念誌・山梨県師範学校』の記載や、中野八吾の『都留市学校沿革誌五』の文章からは、自由教育に対する否定的な外部の声があったことが推測できる。

もともと、山梨県内における自主的な教育活動の動きが全く消えてしまった、というわけではない。たとえば、一九二五(大正一四)年七月には、山梨県教育会北都留郡第二支会から「銀の泉」と題する機関誌が創刊されている。『日本児童文学大事典』の解説では、この雑誌に関して、次のような記述がある。^[13]

銀の泉 一九二五年七月創刊。二九年一〇月(第二五巻一号)まで発行を確認。山梨県北都留郡第二支会より刊行。A5版。編集人は川村章その他。年平均二回発行で、第三巻二号より低学年用をA、高学年用をBと分割して約千部ずつ出す。郷土色の濃い子どもの作文や詩を中心に、読み物としての童謡や童話を、与田準一、吉村徹三、巽聖歌、千葉省三、浜田広介、多胡羊歯らが執筆。一学級一編以上の投稿を義務とし各学校に配布していた。

(白木諭弥)

ここには、山梨県における自由主義教育運動が地域に根を下ろして、さらに展開していった様相の一端を見ることが出来る。こうした機関誌の継続刊行は、『赤い鳥』の地域版の作製運動とも言えるし、また学校を中心とした地域文化創成の試みとも言える。その意味で、山梨県師範学校附属小学校の編集による『小学文芸読本』の仕事も、大正末期から昭和初期にかけての、山梨県内の教員たちの志向と全く無縁であったわけではない。^[14]

『小学文芸読本 上級』の刊行

この読本の続編である『小学文芸読本 上級一』は、「中級」が公刊されてから、約二年後の一九二四(大正一三)年七月一七日に、また「上級二」は、さらにその一年後の一九二五(大正一四)年一〇月二七日に刊行されている。編集者名は、根岸嘉明の個人名である。この時点で根岸は、山梨県師範学校附属小学校の職を退いており、神奈川県青年団連合会の機関誌「武相の若草」の編集に携わっていたようだ。そのことは、後述することにして、先に、根岸嘉明が編集した二冊の『小学文芸読本 上級』に関して見ておこう。再度確認することになるが、その収録作品は以下のようにあった。^[15]

上級一 根岸嘉明編「最初の時計 鈴木善太郎」「争闘

秋田雨雀「万年筆 加藤武雄」「小品三つ 武者小路実篤」「或る少年の死 吉田弦二郎」「春 藤森成吉」「父帰る 菊池寛」「童謡と民謡・五編 北原白秋」 一九二四（大正一三）年七月一七日

上級二 根岸嘉明編「太陽と蛙 小川未明」「泣く児 鈴木重信」「仏陀と戦争 秋田雨雀」「兄弟 山本有三」「未知の世界 加藤武雄」「土蔵 須藤鐘一」「名君 菊池寛」「小僧の神様 志賀直哉」 一九二五（大正一四）年一〇月二七日



『小学文芸読本 上級二』大正14年

この二冊は「上級」用だけあって、「中級」よりも年長の読者を対象として編集されており、青年期特有の様々な煩悶が描かれた日本の現代作家の作品が選択されている。読本の編集方針は「中級」と大きく変わっておらず、日本の現代作家の子どもも向ける視点は鮮明であり、初級を含む『小学文芸読本』四冊全体の作品選択の方向は一貫しており、ブレはない。

「上級一」には、澤柳政太郎と菊池寛の「序」が、そのまま掲載されている。「中級」では、それに続いて師範学校主事の荻野素助が「序」を書いていたが、この第三の「序」は根岸嘉明が代わって書いている。注目すべきは、その根岸の序の末尾に、文部省社会教育課長・督学官の乗杉嘉寿が校閲に加わったことが書き添えてあることである。あまつさえ、「上級二」では、乗杉自身が「序」を寄稿している。そればかりか、「上級二」の表紙には、「文部省認定」の添え書きも加わっていた。すなわちこの『小学文芸読本』は、中級編の「山梨県師範学校附属小学校編」から上級編では「文部省認定」のテキスト集へと「昇格？」したのである。

おそらく、神奈川県社会教育に関わっていた根岸嘉明は、その仕事上の関係から生まれた新たな人的繋がりを伝手にして、乗杉にこの副読本への協力を依頼したのであろう。乗杉がこの読本の作製にあたって、自分の名前を貸したり、自ら序文を寄せたりしたのは、彼自身も、こうした「文芸的」な読本の必要性を認めていたからに違いない。乗杉は、その「序」の中で、「問題として残るは摂取の方法と用意」だと限定を付けながらも、「人間としての陶冶の本義」のために、「新しき教育は文芸の摂取を閑却してはならぬ」と、文芸読本の有効性に言及している。この『小学文芸読本』のシリーズは、山梨県師範学校附属小学

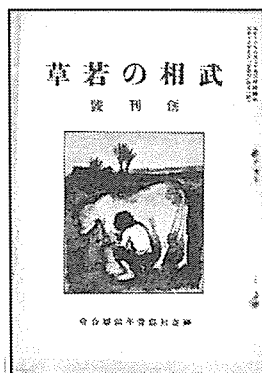
校による編集から始まって、最後には「文部省認定」をうたった副読本となっていたのである。

根岸嘉明と「武相の若草」

山梨県師範学校附属小学校を退任した後、根岸嘉明は、どのように『小学文芸読本』の編集に関わっていたのだろうか。その詳細は不明であるが、前述したように根岸嘉明の名前は、一九二四（大正一三）年九月一日に創刊された「武相の若草」の編集人として登場している。「武相の若草」は、神奈川県青年団連合会の機関誌であり、この団体は半官半民だった。雑誌の内容は、「その名の示すような瑞々しさをもって、県下の青年たちの擁する文叢の牙城となり育っていった」と評されるように、文芸誌の色彩も合わせ持った社会教育雑誌として、県下の青年たちに大いに迎えられたという。^{〔16〕}

現在、雑誌「武相の若草」は、わずかの数しか残されておらず、その全貌は不明だが、一九二四（大正一三）年に創刊号が刊行され、一九三八（昭和一三）年五月号の第一六五号までは、現物が確認できる。雑誌の創刊、および編集には、神奈川県庁教務課の職にあった金井利秋が深く関わっていたらしく、そのことは金井の追悼誌などに必ず言及されているが、「武相の若草」誌の奥付には、直接の編集者として金井の名前は見られない。金井は、神奈川県の小学

校の教員を経て、神奈川県庁の社会教育課に籍を置き、そこで長く活躍した。リベラルな人がらで、多くの交友関係を育んでいたようだ。



「武相の若草」創刊号 大正13年9月

誌を企画刊行した金井の姿勢と、自由主義教育に打ち込み、『小学文芸読本』の編集に携わった根岸の姿勢とは、相通じるところも多かったであろう。

「武相の若草」の投稿作品の選者は、以下のようなだった。すなわち、創作作品は新潮社の「文章倶楽部」の編集者だった加藤武雄、詩は小田原の民衆詩人福田正夫、短歌は前田夕暮、俳句は渡辺未灰である。「武相の若草」の編集は、神奈川県に在住する当時一流の文学者を動員して行われていたのである。地域青年団の活動がこうした文芸的な趣味を持つ雑誌へと向かったのも、この時、文学の享受や創作が、広い裾野をもって青年たちに支持されていたからだと考えられる。

根岸嘉明は、「武相の若草」で、「根岸花鳴」、あるいは「花鳴生」というペンネームを使用しており、誌上に訪問

記事を載せたり、「武相の若草」から派生した文芸雑誌「青芽」の選者を担当したりして、かなり活躍していたようだ。もともと、根岸が、編集兼発行人としてこの雑誌に関わっていたのは、創刊誌から第三二号（一九二七《昭和二》年四月号）までの三年間ほどだったらしく、それ以降、彼の名前は、この雑誌に登場しない。〔17〕

副読本の編集は、『小学文芸読本』の上級（おそらく初級も）の刊行時期から見て、こうした根岸の「武相の若草」編集の仕事と併行してなされていたことになる。

『小学文芸読本』の評価

以上検討してきたことを踏まえると、この『小学文芸読本』は、次のように位置づけられる。

山梨県師範学校附属小学校では、大正期に入ってから全国的に隆盛した自由主義教育の余波を受けて、自由主義教育の影響を受けた一部の教員によって、先進的な実践が展開されていた。『小学文芸読本』の作成も、その試行の副産物だった。この副読本は、同時期に作られた類書の中にあって、在来の昔噺類や外国の翻訳を入れていないという点で、もっとも「現代文芸的」であり、また先駆的な出来上がりだった。

しかし、山梨県師範学校附属小学校では、読本編集の中心人物だった根岸嘉明が退任するのと時期を同じくして、

自由主義教育への傾倒は急激に弱まり、山梨県師範学校附属小学校が主体になって『小学文芸読本』を続けて刊行することはできなくなってしまう。それでも、『小学文芸読本』シリーズは、神奈川県公的機関に職を得た根岸嘉明の手によって、「初級」「上級・一・二」の三冊を続けて公開され、とりあえず叢書としての結構を整えることだけできた。

だが、関東大震災後の一九二四（大正一三）年に入ると、地方の附属小学校によって、教材編成の順序や国定読本の教材との連絡を意識した本格的な文芸的副読本が、一斉に作成され始める。その代表的な副読本が、富山県師範学校附属小学校の編集した『児童文学読本』幼年編三冊・少年編三冊である。また、同じ年には、香川県師範学校附属小学校の編集した『新児童読本』、あるいは東京高等師範と東京女子高等師範附属小学校国語研究部の教員が共同編集した『標準国語副読本』全六冊などが、次々と刊行される。また、一九二五（大正一四）年には、民間出版社の興文社からも、より充実した内容と構成の菊池寛編集の『小学童話読本』全一〇冊が刊行された。こうした諸本と比べると、この『小学文芸読本』は、自由読書のための読書材料集に近く、他の附属小学校が編集した副読本類のように小学校の教育課程全体を十分に見通していたとは言い難い。また大手商業出版社の刊行物と比べても、デザインや装丁の点

で若干見劣りがする。したがって、根岸の『小学文芸読本』シリーズは、それほど話題にはならなかったと思われる。つまり、このシリーズは商業的にも、また当時の教育界への影響という点でも、それほど大きな貢献をしたということはできない。^[18]

だが、そうした点を割り引いたとしても、この『小学文芸読本』が、大正時代に数多く作製された「副読本」の中において、その最先端の走者としての位置を占めていたことだけは間違いない。あらためてここで、それを確認しておきたい。

注

- [1] 井上敏夫編『国語教育史資料・第二巻・教科書史』東京法令出版「大正期・概説」一九八一（昭和五六）年四月二八八頁。のちに、浜本純逸編・井上敏夫著『教科書を中心に見た国語教育史研究』溪水社二〇〇九（平成二二）年九月、に収録された。
- [2] 『月刊国語教育研究』一三五集・一九八三年八月号。のちに、滑川道夫著『解説 国語教育―国語教育史の残響』東洋館出版社 一九九三（平成五）年八月、に収録された。現在までのところ、この本に収録された論考「国語副読本の果たした役割」が、唯一、「国語副読本」に

関する総括的な見通しを示した仕事である。また、木村勇人「大正時代における『国語副読本』の研究」「国語科教育」第四六集・一九九九（平成一一）年、木村勇人「成城小学校における国語教育と副読本」「横浜国大国語教育研究」第九号・一九九八（平成一〇）年は、多くの文献の博搜を基にして大正自由主義教育と国語副読本との関係に鋭く迫っており、この問題における貴重な先行研究となっている。

[3] 「初級」の内容に関しては、広告に記載した通りを挙げた。すべての収録作品の題名は不明である。なお、「中級」は、三康図書館、名古屋市立鶴舞中央図書館、鹿児島県立図書館、家蔵（複本）。「上級」一・二は、国立国会図書館の所蔵である。

[4] 『六十周年記念誌・山梨県師範学校』非売品 一九三五（昭和一〇）年三月 四三四〜四三五頁。

[5] 荻原素助が「師範学校教諭兼師範学校舎監」になったことは、一九一七（大正六）年七月十七日の「官報 一四八八号」に記載がある。

[6] 『山梨県教育百年史第二巻 大正・昭和前期編』山梨県教育委員会 一九七八（昭和五三）年三月 八〇〜九四頁を参照した。

[7] 『山梨教育・二八一号』山梨県教育会 一九一八（大正七）年五月一日発行「動的教育と私」根岸嘉明、この記

事に先行して「山梨教育・二八〇号」には、根岸の授業を参観した「一記者」による「鯉沢小学校参観記」が書かれており、また「山梨教育・二八四号」には、戸沢虎造が『『動的教育と私』を讀みて』を書き、根岸の所論に対して批判の文章を書いている。こうしたことから、当時は、山梨県で「自由教育」の實際に関心が集まっていたことが分かる。

[8]

小原國芳他『八大教育主張』玉川大学出版部 一九七六（昭和五二）年七月 四頁。この本は『八大教育主張』（大正一一年一月・大日本学術協会）発行の「復刻版」で、巻頭には、小原國芳の「復刻に際して」という文章が置かれ、その中に講演会当日の様子が描かれている。

[9]

『六十周年記念誌・山梨県師範学校』非売品 一九三五（昭和一〇）年三月 三八九〜三九〇頁。

[10]

小原國芳編『日本新教育百年史 5 中部』玉川大学出版部 一九六九（昭和四四）年六月 三〇五〜三〇六頁。

[11]

『山梨県教育百年史第二卷 大正・昭和前期編』山梨県教育委員会 一九七八（昭和五三）年三月 八四〜八五頁。

[12]

澁谷俊・大塚源一郎編『峡中文人録』柳正堂書店（甲府） 一九二三（大正一二）年八月 八九頁。

[13]

『日本児童文学大事典』『逐次刊行物・銀の泉』大日本図書 第二卷 五三二頁。

[14]

溝口克己『作文の楽しみ―「銀の泉」を教材に』山梨日

[15]

日新聞社 二〇一〇（平成二二）年一〇月、は、「銀の泉」の中の作品を鑑賞しながら、現在の子どもたちにも作文の面白さ伝えようと思図した書物であるが、そこには、この雑誌の現存数が三四冊であること、また『大月市史・通史編』からの情報として、一九四一（昭和一六）年一月二七日付けの「銀の泉」が最後の発行であることが記されている。

[16]

『小学文芸読本 上級』の二冊に加藤武雄の作品が掲載されているのは、加藤が「武相の若草」の投稿作品の選者だったことと何らかの関係があるかもしれない。

篁浩『武相の若草』初期の青年詩人群像』『金井利秋先生追悼集・若草萌ゆ』さがむ若草の会 一九九一（平成三）年二月 一六〇頁。

なお、金井利秋と「武相の若草」に関しては、以下の文献があるが、どれも根岸嘉明の名前は登場しない。

金井利平「大正期における農村青年の文芸活動―『武相の若草』誌上で活躍した人々―」『相模原市立図書館古文書室紀要』第七号 相模原市立図書館古文書室編 一九八四（昭和五九）年三月 二七〜三九頁。

鈴木貞一「恩師・金井利秋先生の卒寿の賀に寄せて」『郷土相模原』第一三号 一九八七（昭和六二）年八月 三〜一〇頁。

金井利平「終焉の記録（郷土文化探求の人々の歩み）

[17]

—孤愁金井利秋と『武相の若草』—」第一七号

一九九一(平成三)年八月 一五—一八頁。

一九二五(大正一四)年七月に、「武相の若草編集部」の名前で出された『普通選挙法とその精神』という名称の小冊子の「編集兼発行人」も根岸嘉明となっている。

[18]

一九二八(昭和三)年九月に刊行された『百円二百円三百円及び千円で出来る青年文庫図書目録・名古屋市児童図書研究会選定優良児童図書目録』市立名古屋図書館編纂・非売品(名古屋・川瀬書店)の「課外読本」の項目には、一二種類の「課外読本」が挙げられおり、その中に根岸嘉明の『小学文芸読本・上級二』が選ばれている。